

巻頭言

断層映像の原点

小野 庸

私は平成4年3月末、50年近く携わってきた放射線医学の一線から退き、今までに得られた経験、知識を生かし、消化管、肺の癌検診、じん肺診査医、社会保険専任審査員を勤めさせて頂いている。

現在上記の立場から、断層映像の臨床応用状況を、鳥瞰図の様に見ることができる。嘗て私はCT、MRI、RI機器等の設置、運営に係わったが、一番長く慣れ親しんだ直線軌道断層が、地味ながらよく活躍しているのが嬉しい。本日はこれを軸として、断層映像研究会について遠慮のない意見を述べさせて頂く。これについての御意見を賜はりたいものである。

先ず直線軌道暈け断層と私の付き合いは、昭和16年学生時代の参考書、南山堂書店昭和11年発行、新潟医科大学教授田宮知耻夫著「内科レントゲン診断学」の次のような記述からである。肺臓断面撮影法 Tomographie の項に「Tomographの原理は大変面白いし、又学問的の興味もあるが、特殊の病院を除いて一般には尚推賞出来難いものと考えて居る。」とあり、外国成書の装置の図とフィルムが示され、断層像の説明には「肺臓血管分枝像著明ノ然し結局顕微鏡切片標本に見る様な鮮鋭な断面像を期待する事は出来ない。」と記述されている。

初めて断層撮影装置、フィルムの実物を見た時の強烈な印象は、私の脳裏に今も残っている。昭和18年陸軍軍医学校乙種学生の時であった。軍医学校のレントゲン学教科書は、「陸軍軍医団発行昭和一七年編軍陣レントゲン學前編」で、「断層寫真ハ物體內ノ任意ノ層ヲ特別ニ寫ス方法ニシテ、其ノ際物體內ノ他ノ層ハ著シクボケテ其ノ像ヲ成サザルナリ。其ノ厚ミハ装置ニ依リ、種々ナルモ、肺ヲ一種ノ厚サニ断ツハ必ズシモ難事ニアラズ。」と結んでいる。戦後、肺結核全盛の頃、断層撮影装置は是非必要であったが、何しろ高価で九州に

は九大にある位であった。苦心の末エックス線装置に自作の補助具を付け実用に供し、「簡易なる断層写真撮影装置」との論文を昭和25年「臨床と研究」に発表した。自分の病院は勿論、国立療養所からの依頼で撮影したような時代であった。

回転横断撮影、多軌道断層は、断層映像の歴史に大なる貢献をし、今日の画像医学の礎となり、新進の機器、技術に座を譲ろうとしている。しかし私は直線軌道暈け断層装置は現在、断層映像の原点として、また普及の度合いから見て、その存在価値は大きいと信じている。

断層映像研究会について、さらに重要な事は、日本医学放射線学会、日本核医学会、日本放射線腫瘍学会その他画像診断一般、X-CT、E-CT、MRI、超音波等々の学会、研究会があるが、本研究会はこれ等がない特異の点がある。発会当時これは当然の事として受入れられていたが、忘れられようとしている現在、私はここに再確認を求めたい。

上記学会に所属し研究に係わる医師、物理学者、機器技術者、更には生物学者、コンピュータ技術者は多いが、我々の放射線診療における盟友ともいべき診療放射線技師が関与する余地が少ない。

日本医学放射線学会では診療放射線技師の入会、研究発表は不可能でないにしてもそのバリアは高い。その他の学会では入会はできるが、核医学診療、放射線治療に携わる大病院の診療放射線技師の数は限られている。暈け断層は全国広く普及しているから、これを軸に多くの職種の方々と共に、断層映像の研究を發展すべきである。断層映像研究会は最初から門戸が広く開放し、誰でもが自由に平等に意見を交換できる場である。この意味において、發展的解消等という語は軽々に口にすべきでない。

(九州産業衛生協会理事)